三遊亭円朝口怪談牡丹燈籠

一　老翁相レ色判二生死一　白翁堂勇斎が、新三郎の人相をみて、幽霊にとりつかれているから生命が危険だと見抜いたこと。
二　高僧与レ符隔二陰陽一　勇斎が紹介した新幡随院の良石和尚が新三郎にまじないの札をくれて、お米とお露の幽霊が新三郎の家へ入れないようにしたこと。
三　慄と足元から総毛立ちまして　幽霊の姿をのぞき見した伴蔵が、恐ろしくて、ぞっと足元から全身の毛が逆立つようになったこと。
四　ごぜへやす　「ございます」の江戸なまり。
五　掛鐶　戸締まりに使う輪形の金具。
六　どうかしたの何のといふ騒ぎじや御在いやせん　どうかしたのなんのといってるようなのんきな場合じゃありませんということ。「御在いやせん」は、ございませんの江戸なまり。
七　畑を鋤ッたり　萩原家の畑を作男のごとく伴蔵が耕やすこと。以下の仕事ぶりは、伴蔵と新三郎の人間関係をよく表わしている。
八　使ひ早間　手早くいろいろの人から頼まれた使いをしてやること。
九　店賃　家賃。借家代。

第八回

一　老翁相レ色判二生死一
二　高僧与レ符隔二陰陽一

萩原の家で女の聲がするから、伴藏が覗いて喫驚し、慄と足元から總毛立ちまして、物をも云ず勇齋の所へ驅け込ふとしましたが、怖いから先自分の家へ歸り、小さくなつて寢てしまひ、夜の明けるのを待兼て白翁堂の宅へやつて參り、伴「先生〳〵。勇「誰だノウ。伴「伴藏でごぜへやす。勇「なんだノウ。伴「先生一寸爰を明けて下さい。勇「太層早く起たノウ。お前には珍らしい早起だ。待て〳〵今明けてやる。と掛鐶を外し明けてやる。伴「たいそう眞暗ですネー。勇「まだ夜が明けきらねへからだ。夫におれは行燈を消して寢るからナ。伴「先生靜かにおしなせへ。勇「手前が慌てゝ居るのだ。なんだ何しに來た。伴「先生萩原様は大變ですヨ。勇「どうかしたか。伴「どうかしたの何のといふ騒ぎじや御在いやせん。私も先生も斯うやッて萩原様の地面内に孫店を借て、お互ひに住ッて居り、其内でも私は尚ほ萩原様の家來同様に畑を鋤ッたり庭を掃たり、使ひ早間もして、嗅々は洒ぎ洗濯をして居るから、店賃も取らずに偶には小使を貰ッたり、衣類の古いのを貰ッたりする恩のある其大切な萩原様が大變な譯だ。毎晩女が泊りに來ます。勇「若くッて獨り者で居るから、隨分女も泊りに來るだらう。併し其女は人の惡いやうな者ではないか。伴「なに、そんなわけではありません。私が今日用が有て他へ往て、夜中に歸て來ると、萩原様の家で女の聲がするから一寸覗きました。勇「わるい事をするナ。伴「するとネ、蚊帳が斯う釣てあつて、其中に萩原様と奇麗な女が居て、其女が見捨てゝ下さるなといふと、生涯見捨てはしなひ。假令親に勘當されても引取て女房にするから決して心配するナと萩原様

一〇　髪の毛が顔に下り　お露の島田髷の側面の髪の毛が顔に下がっている様子で、いかにも凄艶な感じがでている。
一一　裾がなくッて腰から上ばかり　裾から下のほうがスーッとみえないというのは幽霊の典型的な姿。←補注一九八
一二　怖くて歯の根も合ず　幽霊をみて恐ろしくてふるえるので、カチカチと歯と歯があたっていること。
一三　幽霊と逢引……支那の小説にそういふ事があるけれども　中国小説『剪燈新話』の中の「牡丹燈記」のこと。
一四　陽気盛ん　万物が動き、生まれでようとする気が盛んにおこること。
一五　陰気　万物生成の根本になる精気の一つと考えられたもの。
一六　偕老同穴の契　ともに年をとり、ともに同じ墓穴に葬られるということで、夫婦の契りのかたいこと。
一七　精血　精分、精力などと同じ。
一八　懇意にし　心やすくつきあっていての意。

がいふと、女が妾は親に殺されてもお前さんの側は放れませんと、互ひに話しをして居ると、勇「いつまでも其様な所を見ているなヨ。伴「ところがネー、其女が唯の女じやアないのだ。勇「惡黨か。伴「なに、そんな譯じやアない。骨と皮ばかりの痩た女で、髪は島田に結て髪の毛が顔に下り、眞青な顔で、裾がなくッて腰から上ばかりで骨と皮ばかりの手で萩原様の首たまへかじりつくと、萩原様は嬉しそうな顔をして居ると、其側に丸髷の女が居て、此奴も痩て骨と皮ばかりで、ズッと立上ッて此方へ來ると、矢張り裾が見へないで、腰から上ばかり、恰で繪に描た幽霊の通り、夫れを私が見たから怖くて歯の根も合ず、家へ逃げ歸ッて今まで默ッて居たんだが、どう云ふ譯で萩原様があんな幽霊に見込れたんだか、さッパリ譯が判りやせん。勇「伴藏ほんとうか。伴「ほんとうか嘘かと云て馬鹿〳〵しひ。何で嘘を云ひますものか。嘘だと思ふならお前さん今夜往て御覽なせへ。勇「おらアいやだ。ハテナ昔から幽霊と逢引するなぞといふ事はない事だが、尤も支那の小説にそういふ事があるけれども、そんな事はあるべきものではない。伴藏嘘ではないか。伴「だから嘘なら往て御覽なせへ。勇「もう夜も明けたから幽霊なら居る氣遣ひはない。伴「そんなら先生、幽霊と一所に寢れば萩原様は死にませう。勇「それは必ず死ぬ。人は生て居る内は陽氣盛んにして正しく清く、死ねば陰氣盛んにして邪に穢れるものだ。夫ゆゑ幽霊と共に偕老同穴の契を結べば、縱令百歳の長壽を保つ命も其爲めに精血を減らし、必ず死ぬるものだ。伴「先生、人の死ぬ前には死相が出ると聞て居ますが、お前さん一寸往て萩原様を見たら知れませう。勇「手前も萩原は恩人だらう。我も新三郎の親萩原新左衞門殿の代から懇意にし、親御の死ぬ時に新三郎殿の事をも頼まれたから心配しなければならない。此事は決して世間の人に云ふなヨ。伴「ヱ、〳〵嗅にも云はないくらゐな

書名：明治開化期文学集
怪談牡丹燈籠
頁碼：296~299
作者：三遊亭円朝 著 / 興津要 注釈
出版者：角川書店 (東京)
出版時間：1970/12

一　藜の杖　「藜」は、原野に自生する藜科の一年生の草木。高さ約一メートル、葉は卵形で互生し、初夏に緑黄色の小さい花を開く。その茎でつくった杖で、老人用。

二　ポク〳〵出懸けて　気軽に足早に出かけた様子。

三　別懇　とりわけしたしく交際をしたこと。

四　天眼鏡　易者の持っている柄のついた大形の凸レンズ。

五　陰徳を施して寿命を全くした咄し　世間に知れない善行を施したために、天から与えられた寿命を完全に終えた噺。たとえば、人情噺「ちきり伊勢屋」などがそれで、白井左近という易者に、来年は死ぬと予告された伊勢屋伝次郎が、二〇〇両の金がないために死のうとした母娘にその金を与えたことから寿命をまっとうする噺。

六　図らず出逢ひ　思いがけず逢ったこと。

七　私はあれをゆく〳〵は女房に貰う積りで御座います　お露を幽霊だと気がつかない新三郎が、将来、彼女を正式の妻にするのだと白翁堂に話したところ。

譯ですから、なんで世間へ云ひませう。勇「屹度いふなヨ。默て居れ。其内に夜もすッかり開け放れましたから、親切な白翁堂は藜の杖を曳て伴藏と一所にポク〳〵出懸けて萩原の内へ參り「萩原氏〳〵。新「どなた様でございます。勇「隣の白翁堂です。新「お早い事、年寄は早起だ。なぞと云ひながら戸を引明け、「お早う入らつしやいました。何か御用ですか。勇「貴君の人相を見様と思ッて來ました。新「早朝から何で御座います。一ッ地面内に居りますから何時でも見られませうに。勇「そうでない。日輪の御上りにならうとする所で見るのがよいので、貴君とは親御の時分から別懇にした事だから。と懐中より天眼鏡を取出して、萩原を相て、新「なんですネー。勇「萩原氏、貴君は二十日を待たずして必ず死ぬ相がありますヨ。新「へー私が死にますか。勇「必ず死ぬ。中々不思議な事も有るもので、どうも仕方がない。新「へーそれは困つた事で、それだが先生、人の死ぬ時は其前に死相の出ると云ふことは兼て承ッて居り、殊に貴老は人相見の名人と聞て居りますし、又昔から陰徳を施して壽命を全くした咄しも聞て居ますが、先生どうか死なゝい工夫は有りますまいか。勇「其工夫は別に無いが、毎晩貴君の所へ來る女を遠ざけるより外に仕方が有りません。新「イ、ヘ、女なんぞは來やアしません。勇「そりやアーいけない。昨夜覗ひて見たものが有るのだが、あれは一体何者です。新「あなた、彼は御心配をなさいまする者では御在いません。勇「是程心配になる者はありません。新「ナニあれは牛込の飯島といふ籏下の娘で、譯あッて當時は谷中の三崎村へ、米と云ふ女中と二人で暮して居るも、皆な私ゆゑに苦勞するので、死んだと思ッて居たのに此間圖らず出逢ひ、其後は度々逢引するので、私はあれをゆく〳〵は女房に貰う積りで御座います。勇「とんでも無い事をいふ。毎晩來る女は幽靈だがお前知らないのだ。死んだと思たなら猶更幽靈に違ひない。其マア女が糸のやうに痩た骨と皮ばかりの手で、お前さんの首ッたまへかじり付くそうだ。そうしてお前さんは其三崎村に居る女の家へ往た事があるか。と云はれて往た事はない。逢引したのは今晩で七日目ですがといふものゝ、白翁堂の咄に萩原も少し氣味が惡くなッたゆゑ、顔色を變へ、新「先生、そんなら是から三崎へ往て調べて來ませうと、家を立出で、三崎へ參りて、女暮しで斯ういふ者はないかと段々尋ねましたが、一向に知れませんから、尋ねあぐんで歸路に、新幡隨院を通ほり抜けやうとすると、御堂の後に新墓が有りまして、夫に大きな角塔婆が有て、其前に牡丹花の綺麗な燈籠が雨ざらしに成てありまして、此燈籠は毎晩お米が点けて來た燈籠に違ひないから、新三郎は彌々訝しくなり、お寺の臺所へ廻り、新「少々伺ひたう存じます。那所の御堂の後に新らしい牡丹の花の燈籠を手向てあるのは、あれは何所の御墓でありますか。僧「あれは牛込の籏下飯島平左衞門様の娘めで、先達て死去りまして、全体法住寺へ葬むる筈の所ろ、當院は末寺じやから此方へ葬むッたので。新「あの側に並べてある墓は。僧「あれは其娘の御附の女中で是も引續き看病疲れで死去いたしたから、一所に葬られたので。新「そうですか。夫では全く幽靈で。僧「なにを。新「なんでも宜しう御座います。左様なら。といひながら喫驚して家に馳け戻り、此趣を白翁堂に咄すと、勇「それはマア妙な譯けで、驚いた事だ。なんたる因果な事か。惚れられるものに事を替て幽靈に惚れられるとは。新「どうもなさけない譯で御坐います。今晩も亦來りませうか。勇「それは分らねへな。約束でもしたかへ。新「へー、あしたの晩屹度來る、と約束をしましたから、今晩どうか先生泊つて下さい。勇「眞平御免だ。新「占なひでどうか來ないやうになりますまいか。勇「占ひでは幽靈の所置は出來ないが、あの新幡隨院の和尚は中々に秀い人で、念佛修

八　尋ねあぐんで　お露の家を新三郎がいくら捜してもみつからないでいやになったこと。

九　塔婆　卒塔婆の略。供用のために墓の後ろに立てる細長い板。

一〇　雨ざらし　屋外で囲いもなく、雨にぬれるのにまかせていること。

一一　新三郎は彌々訝しくなり　お露の家はみつからないし、新しい墓の前に、お米が毎晩つけてくる牡丹の花のついた燈籠まであるので、新三郎は、白翁堂にお露が幽霊だといわれたことと思いあわせていよいよ気味が悪くなったこと。

一二　末寺　本山の支配下にある寺。新幡隨院は法住寺の末寺にあたる。

一三　占ひでは幽霊の所置は出来ないが　占いでは、幽霊が来ないようにうまく扱う方法はないという意味。